

佳作

安井なつみさん 文学部日本文学科 3年

「流しのしたの骨」 江國香織著 新潮社

我が家には、ものを共有するという概念があまりない。例えばコンポは1人一台持っているし、文房具はリビングにあるものでさえ所有者に許可なく使うと無礼者の扱いを受ける。

この話を友達に話すと、大層驚かれる。しかし我が家ではそれが普通だった。

「よそのうちのなかをみるのはおもしろい。その独自性、その閉鎖性。」

この作品のあとがきで江國香織はこうかたる。

そう、『流しのしたの骨』は家族の話である。

『流しのしたの骨』にわたしは三度出会った。

一度目は父の本棚、二度目は母の本棚、三度目にしてようやく自分で手に取った。

二度目までと三度目の大きな違いは、私が江國香織を知っていたかどうかにある。

江國香織の作風を知らなかった一度目と二度目の私は『流しのしたの骨』を恐ろしいホラー小説に違いない!と決めつけ、決して読まなかった。

実際どんな話だったかというのは、新潮文庫の裏表紙を見れば分かることだから、ここでは語らない。ここではただ、宮坂家の家族の話、と留めておこう。

主人公のここと子には、ずっと解けない謎があった。雨の日になると「すーん」となってしまうのだ。「心臓がすばんと抜け落ちてしまったような感じ、下半身が空っぽになったようで心許なく、途方もなく虚無的な感じ。「すーんとする」というのが、あの頃の私にできた唯一の表現だった」と、主人公は語る。

仲が良く、互いに干渉しあう宮坂家の人々であったが、ここと子の「すーん」をなくすことはおろか理解できるものもいなかった。

しかし、ここと子は恋人の深町直人というので、この「すーん」がなくなると気付く。

家族というのは不思議なもので、何の血の繋がりもないものが解決できることさえ解決できない。それでいて、逃れられない絆組み。愛さずにはいられない人々。ここと子は宮坂家を愛しているし、宮坂家の人々もここと子を愛している。時には深町直人よりも愛し愛される家族。

我が家がものを共有しなくても、いつの間にか同じ本を三人とも読むように。宮坂家の長女と一番下の弟が全然似てなくても、兄弟と分かる瞬間があるように。

家族とは閉鎖的で独自の愛しいものである。